

中世的諸ヨーガと *Yogasūtra* : ナーラーヤナ・ティールタの *Yogasūtra* 解釈

遠 藤 康

はじめに

インドの代表的宗教実践であるヨーガは、様々な伝統と種々の文献によって古代から現代に至るまで伝承されてきた。パタンジャリ Patañjali に帰される *Yogasūtra* (以下 YS) もそのような文献のひとつであり、その思想実践体系は現存最古の註釈書 *Yogabhāṣya* (540-650 年; 以下 YBh)¹ によってはサーンキヤの二元論思想に基づき説明される。この体系は Patañjala-yoga と呼ばれインド六派哲学の一つに数えられている。したがって、Patañjala-yoga は 7 世紀以前のヨーガ実践とその思想的解釈の一つの典型と見なされていたと考えることが出来るだろう。また、YS がヨーガに関する権威と見なされていたことは、後代の様々な文献に YS が引用されることから確認される。しかし、現代にまで伝承されている様々なヨーガ、例えば Haṭha-yoga 等と Patañjala-yoga の間には、実践方法とその意味付けの基礎となる思想の両面で大きな隔りがある。この隔りとは、現代に伝わる様々なヨーガの多くが中世期に発達したものであることに起因すると考えられる。

中世インド思想の研究については、「従来のインド思想研究の主力は、古代思想に置かれ、中世思想は比較的等閑に付されてきた嫌いがある」と前田専学博士によって指摘されているが [前田 (編) 1991: i, 2], ヨーガが思想であるか否かの問題は別として、中世期の Patañjala-yoga についてもヴィジュニャーナビクシュ Vijnānabhikṣu の *Yogavārttika* や *Yogasārasaṅgraha* 等に関するもの²の他は従来ほとんど研究がなされてこなかったと言えよう。インド中世期 (600-1800)³、特に10世紀頃以後、有神論とヴェーダーンタ哲学さらに Haṭha-yoga や Bhakti-yoga 等の新興ヨーガ技法など様々な新しい思想や瞑想体系が興隆する。それにともない、Patañjala-yoga の体系もいわばそれら新興の思想や実践方法の挑戦に直面することになる。15—16世紀頃ヴィジュニャーナビクシュによって作られた YBh に対する復註 *Yogavārttika* は、有神論とヴェーダーンタ思想、そしてサーンキヤ思想とを Patañjala-yoga の体系中に総合することによりそのような挑戦に答えようとするものであった。

同様な試みとしてさらに、17世紀にナーラーヤナ・ティールタ Nārāyaṇa Tīrtha⁴ によって作られた YS 註 *Yogasiddhāntacandrikā* (以下 YSC) を挙げる事が出来る。YSC は有神論とヴェーダーンタ思想のみならず、新しい様々な瞑想体系をも視野に入れた YS の解釈を提示する

註釈書であり、新しい思想や瞑想体系の挑戦に対する Pātañjala-yoga の対応の一つの形を示す興味深い資料である。しかし、出版されたテキストが欠落部を伴い不完全であること等の理由によると思われるが、その内容は未解明であると言っても過言ではない。本稿では、中世末期に作られた YSC が、中世的諸ヨーガをどのように YS の体系と関係づけるかについて簡単に報告し、未だ解明されていない中世期の YS 解釈史の一資料としたい。

尚、本稿で用いる YSC のテキストは参照の便を考慮し基本的には出版本 (Ch. ed. と表示) を用いたが、写本に基づく訂正を入れた箇所も多いため、煩雑とされない限りで注記したことを予めお断りしておきたい。

1. Pātañjala-yoga と15種のヨーガ

まず YSC にはどのような中世的諸ヨーガが言及されるのかを概観したいが、その前に、YSC において Pātañjala-yoga がそれらの諸ヨーガと比べていかなるものとして捉えられていたのか確認しておきたい。

周知のごとく、YS と YBh においてはヨーガあるいは samadhi は認識を伴う精神集中 (有想三昧 samprajñāta-samādhi) と認識を伴わない精神集中 (無想三昧 asamprajñāta-samādhi) の2種とされている [YS 1.17; 1.18; YBh 1.2; 1.17; 1.18等]。ナーラーヤナ・ティールタは、このうちの認識を伴わない精神集中 (asamprajñāta-samādhi) を Rāja-yoga であると YSC 1.20 において述べる。

… paravairāgyād asamprajñāta itareṣām … bhavaty arthaḥ / ayam eva ca rājayoga ity ucyate / tad uktaṁ smṛtau samādhis tatra nirbijo rājayogaḥ prakīrtitaḥ/dīpavad rājate yasmād ātmā saccinmayaḥ prabhur iti // [20, 21-24].

既に別稿 [遠藤 1995: 958] において指摘したように、Rāja-yoga とは Pātañjala-yoga のみを意味する言葉ではなく、一般的には、個々の実践体系が基づいている思想によって最高と解釈される精神的体験をもたらす“実修の王者、最高のヨーガ”を意味する。つまり、ナーラーヤナ・ティールタは asamprajñāta-samādhi が最も優れた実修であると考えているのである。

では samprajñāta-samādhi は Rāja-yoga ではないのだろうか。YSC 1.1 は次のように言う。

… ityādiśrutismṛtisiddhāparamapurūṣārthasādhanatākātma⁶-sākṣātkārasādhana-tayā śravaṇamanānididhyāsanādīny ātmā vāre draṣṭavyaḥ śrotavyo mantavyo nididhyāsītavya ityādināmnātāni / tatra nididhyāsanam pradhānam / tatsahakṛtād eva manaso 'laukikābādhitātmagocarapramāsambhavāt sarvaviññādirūpatatphala-saṃvādāc⁷ ca / nididhyāsanañ caikatānatādirūpo rājayogāparaparyāyaḥ samādhiḥ/

tatsādhanan tu kriyāyogaś caryāyogaḥ karmayogo haṭhayogo mantrayogo jñānayo
 gō 'dvaitayogo lakṣyayogo brahmayogaḥ śivayogaḥ siddhiyogo vāsanāyogo
 layayogo dhyānayogaḥ premabhaktiyogaś ca / tad etat sarvaṃ sāmānyaviśeṣabhāve-
 nāṣṭāṅgayogena kavalīkṛtam iti manasi nidhaya sāṣṭāṅgaṃ saphalaṃ yogam …
 vyutpādayiṣyan … prathamam śāstrasyārambham pratijānite bhagavān patañja-
 lih / athayogānuśāsanam iti // ⁸ [1, 24 - 2, 11]

YSC は *Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad* 2. 4. 5 に説かれる nididhyāsana (瞑想) を認識を伴う精神集中 (samprajñāta-samādhi) の一様態であるとし、それが Rāja-yoga の二次的同義語 (apara-paryāya) であるとする。つまり、samprajñāta-samādhi もまた Patañjala-yoga が説く最も優れた実修体系の一部なのである。

そして、その samprajñāta-samādhi を達成する手段 (sādhana) として、合計15種類の様々な中世的ヨーガが列挙されているのである。確認のためそれらをもう一度記そう: 1) Kriyā-yoga, 2) Caryā-yoga, 3) Karma-yoga, 4) Haṭha-yoga, 5) Mantra-yoga, 6) Jñāna-yoga, 7) Advaita-yoga, 8) Lakṣya-yoga, 9) Brahma-yoga, 10) Śiva-yoga, 11) Siddhi-yoga, 12) Vasana-yoga, 13) Laya-yoga, 14) Dhyāna-yoga, 15) Premabhakti-yoga。YSC はそれらすべてが何らかの形で YS 2.29⁹ 以下に説かれるヨーガの八支、すなわち yama (禁戒), niyama (勸戒), āsana (坐法), prāṇāyāma (調息), pratyāhāra (制感), dhāraṇā (総持), dhyāna (禅定), samādhi (三昧)¹⁰ に含まれるとするのである。

上の引用中の語 “aparaparyāya (二次的同義語)” は本稿において重要な意味を持つ言葉であるので、“apara” を「二次的」と解する理由をここで述べておきたい。後述するように、“para・apara” の区別は離欲 (vairāgya) に関して YSC 1.17, 18 においても用いられている¹¹。そこにおいて YSC は YS 1.16: tatparaṃ puruṣakhyāter guṇavairiṣṇyam に基づき離欲を2種とする *YBh* 1.16, *TV* 1.16¹² に従った解釈を示しているのであり、“para” “apara” はそれぞれ「高次」「低次」を意味している。前に述べたように、YSC は asamprajñāta とその前段階にあたる samprajñāta の2種の samādhi のうち前者を Rāja-yoga すなわち最高のヨーガと解するのであるから、上に引用した YSC 1.1 において samprajñāta-samādhi が Rāja-yoga の “aparaparyāya” であると述べられる際の “apara” は、離欲に関してそう用いられるのと同様に、asamprajñāta-samādhi と比較した場合の「低次」性を意味していると考えられる。それゆえ “aparaparyāya” は「二次的同義語」を意味していると考えられるのである。

さて、上に掲げた15のヨーガの全てが実際に実践されていたものかどうかは明らかではない。Karma-yoga, Jñāna-yoga, Bhakti-yoga は *Bhagavadgītā* に既に見られる言葉であるが、Bhakti-yoga は中世のヒンドゥー教を考える上で非常に重要なものである。Haṭha-yoga, Mantra-yoga, Laya-yoga そして Lakṣya-yoga など、いわゆる *Yoga-upaniṣad* などとその名前が

見いだされ実践方法に関しても中世期に作られた文献が現存するヨーガも挙げられている。ナーラーヤナ・ティールタが、どのような典拠によってこれら15種を列挙したのかも現段階では明らかではないが、しかし、彼の時代に実際に広く実践されていたものも含まれているであろうと推測される。

YSC はこれらの中世的諸ヨーガを YS の八支ヨーガの体系に組み入れるのだが、どの様に組み入れるのか、以下に実例を検討してみたい。しかしながら紙幅の関係で15のヨーガ全ての検討は不可能であるため、幾つかを選んで考察したい。中世インド宗教と Pātañjala-yoga の関係を考える上で Bhakti-yoga の考察は非常に重要ではあるが、YSC の Bhakti-yoga に関する議論が非常に大きく広範囲にわたり、また当該部分が出版本で欠落しているため、本稿での考察は断念せざるを得ない。本稿では、実践方法に関して中世期に作られた文献が現存することからナーラーヤナ・ティールタの時代に実際に行われていた可能性が高いと思われる Haṭha-yoga, Mantra-yoga, Laya-yoga そして Lakṣya-yoga について検討を加えたい。しかし、本稿で考察するこれらのヨーガのいずれについても、それらを専門に研究する者ではない筆者にとっては、その本質がどのようなものであるかを簡単に述べることはむずかしい。以下においては先行研究を参考にしつつ考察を進めたい。

2. Haṭha-yoga

Haṭha-yoga は現代の日本でも広く行われており、様々な坐法と呼吸法を特徴とするヨーガであることは知られている。その特徴を極めて簡略に言えば次のようになる¹³。我々の身体は、我々が知覚可能な粗大な身体 (sthūla-śarīra) とそれと密接に結びついているが我々の目には見えない微細な身体 (sūkṣma-śarīra) との2つからなる。このうちの粗大な身体を様々な浄化法や呼吸法、坐法によって浄化調整することによって、粗大な身体と密接に結びついた微細な身体の中の脈管を流れる生氣 (purāṇa) の流れを制御し、そのエネルギーを増大させる。そして微細な身体の下部に眠っている力であるクンダリーニ (kuṇḍalinī) を目覚めさせ、微細身中にあるチャクラ (cakra)¹⁴ を開かせながら身体の頂上まで上昇させる。これによって個我と最高我の合一が得られる。

タントラ的なヨーガの研究紹介で有名な Avalon によれば、Haṭha-yoga は後に述べる Laya-yoga と密接に関係しているが、Laya-yoga がクンダリーニの覚醒に重点を置くのに対し、Haṭha-yoga では生氣の制御技術に重点が置かれており [Avalon 1974: 223]、Haṭha-yoga のさらに高度な姿が Laya-yoga である [Avalon 1974: 222]。いずれにしても代表的な幾つかの Haṭha-yoga 文献には、様々な坐法と呼吸法、身体浄化法が詳しく解説され、身体の浄化と活性化が Haṭha-yoga の大きな目標の一つであることが理解される¹⁵。

このような Haṭha-yoga を YSC はどの様に Pātañjala-yoga と関係づけるのだろうか。Haṭha-yoga は YS 2.46 と YS 2.49 によって示される八支中の坐法 (āsana) と調息 (prāṇāyā-

ma) に含まれると解釈されている¹⁶。ナーラーヤナ・ティールタは YSC 2.46 で Padma-āsana, Siddha-āsana, Bhadra-āsana, Vira-āsana, Svastika-āsana, Siṃha-āsana 等38種の坐法を列挙し, Haṭha-yoga 文献の膨大な引用によってそれらを説明している [82, 7-87, 31]。また, YS 2.50¹⁷ に説かれる3種の呼吸法を pūraka (吸気), recaka (呼気), そして sahitakumbhaka (吸気と呼気とともに行われる氣息の保持) [89, 4-6; 90, 1-5], YS 2.51¹⁸ に説かれる呼吸法を kevalakumbhaka (吸気と呼気なしに行われる氣息の保持) と解釈する [90, 16-20]。YS 2.50, 51 が説く呼吸法はすでにヴァーチャスパティミシュラ Vācaspatimiśra によって pūraka, recaka そして kumbhaka と呼ばれているが, YSC は sahita や kevala だけではなくそれ以外にも6種や7種の kumbhaka の分類など様々な調息技法を, 坐法の解説においてと同様に, Haṭha-yoga 文献や Purāṇa からの膨大な引用によって説明する [89, 4-101, 16] という点で Haṭha-yoga 技法の一層の発達を反映している¹⁹。

坐法や呼吸法などの Haṭha-yoga の技法と関連して, YSC の説く Karma-yoga についてもここで触れておきたい。YSC の説く Karma-yoga とは *Bhagavadgītā* に説かれるような Karma-yoga, すなわち「利害を超越した行為によって救済を達成する手段 (method of achieving salvation through disinterested action) [Varenne 1989: 234b, 24-26]」ではない。YSC 2.28 によれば Karma-yoga とは Haṭha-yoga の技法である ṣaṭkarma すなわち「6種の浄化法 [Yoga Kośa pt. 1: 138b, 25-26]」と mudrā すなわち「姿勢 (pose, attitude), 坐法と調息の中間の状態 (states midway between āsana and prāṇāyāma) [Yoga Kośa pt. 1: 111a, 37-38]」である。これらは正しい認識と samādhi の獲得にとっての障害となる病気を防ぐために行われる²⁰。ナーラーヤナ・ティールタは, これらの技法は YS 2.28²¹ によって示唆されるが, 身体の浄化のための技法である Haṭha-yoga の支分であるから Raja-yoga 達成の為の直接的手段である八支中には含まれない, と言う²²。

3. Mantra-yoga

Avalon によれば, Mantra-yoga とは次のようなヨーガである。世界をは名称と形態 (nāma, rūpa) によって構成されており, 心の作用とは心がそれらの形象に変化することである。この心作用の道徳的性質の如何によって人生のあり方が決定されるので, 心の情態 (bhāva) の浄化が目指されねばならない。その手段として, 心にとって最も身近な対象である名称と形態のうち, 純粋な情態を生み出す特定のものが瞑想対象として選ばれる。これが, 五神格の粗大な (sthūla) あるいは属性を伴った (saguṇa) 禪定 (dhyāna) と呼ばれる。通常のヨーガの八支以外に, 何らかの像, 象徴, 図像, 壁に書いた図形, マンダラ, ヤントラなどの道具の使用, 印相 (mudrā) や布置観 (nyāsa) とともに, 規定のマントラの誦誦が行われる。神格等をあらゆる全ての種子真言やブラフマンを表す聖音 Om の根元は根本原質の諸グナの最初の振動が発した原初の音声であり, 種子真言は原質が展開して現れた神格達の有属性 (saguṇa) の形態に相当するもので

あると考えられている。このヨーガは最も簡単なものであり、他のヨーガを行うことが出来ない者達に適している [Avalon 1974: 196-197]。

では YSC では Mantra-yoga はどの様なものとされているのだろうか。YSC において、Mantra-yoga は聖音 Om の読誦 (japa) である。聖音 Om は自在神 (īśvara) あるいは最高我 (paramātman) を表す²³。YSC 1.28 によれば、YS 1.28 に説かれる聖音の読誦 (japa) と聖音の表示対象の瞑想 (tadarthabhāvana) は自在神への祈念 (īśvarapraṇidhāna) の 2 つの様態である。そして、この自在神への祈念 (īśvarapraṇidhāna) が Bhakti-yoga であるとされる。従って Mantra-yoga は Bhakti-yoga に含まれていることになる²⁴。さらに、YSC 2.32 によれば Mantra-yoga は八支中の勤戒 (niyama) に含まれる²⁵。YSC の説く Mantra-yoga は確かにマントラの読誦による実修ではあるのだが、Avalon が解説するタントラ的なそれとはかなり異なったヨーガであると言えよう。

4. Laya-yoga

前述のように、Avalon によれば Laya-yoga は Haṭha-yoga と密接に関係している。Haṭha-yoga がどちらかといえば粗大な身体の調整によって微細な身体に働きかける実修であるのに対し、Laya-yoga は微細な身体に存して我々には通常知覚されない神々の座所 (piṭha) すなはち 6 つのチャクラ (cakra) や身体中に存する根元的な力を活性化させるヨーガである。身体中にある 6 つのチャクラのうち一番下の Mūlādhāra-cakra に存する根元的力 (prakṛti-śakti)、またの名をクンダリーニ (kuṇḍalinī) という力を覚醒させ、身体中央部を縦貫する脈管とそれにそって存する 5 つのチャクラを通過して上昇させ、頭の少し上にある Sahasrāra-cakra に存する最高我 (Saccidānandamaya-Paramātman) の中に合一させる、帰入 (laya) させる、という瞑想である [Avalon 1974: 222-223]。このヨーガは、しばしば Kuṇḍalinī-yoga と呼ばれる。

一方、YSC においては、Laya-yoga は認識を伴う精神集中 (samprajñāta-samāhi) において起こる心の状態である等至 (samāpatti) であると解釈され、等至を述べる YS 1.41 に説かれると言われる。YSC 1.41 は次のように述べる。

samprajñātasya viśayaṃ pradarśayan samprajñātāparaparyāyaṃ layayogam āha //
kṣīṇāvṛtter iti // kṣīṇāvṛtter abhijātasyeva maṇer grahīṭṛgrahaṇagrāhyeṣu tatstha-
tadañjanatā samāpattiḥ (YS 1.41) // abhyāsavairāgyābhyām apagatavṛttyantarasya
cittasya grahīṭṛgrahaṇagrāhyeṣu grahitā puruṣaḥ sthūlasūkṣmabhedena grahaṇaṃ
gṛhyate 'rtho 'nenetindriyam evaṃ grāhyaṃ ca grahīṭṛgrahaṇagrāhyāni / teṣu yā
tatsthatadañjanatā tatsthenoparāgeṇa tadañjanatā tanmayatā samyaktadākaratā
samāpattiḥ samyagāpattir layaḥ samprajñātalakṣaṇo yogo bhavatity arthaḥ / [44,
5-14].

YSC は、*samāpatti* とは心が我 (*puruṣa*) あるいは感官あるいは認識対象の影響 (*uparāga*) によってそれらの形象をとること (*samyaktadākāratā*) であると言う。*YBh* によれば *samāpatti* とは心 (*citta*) が認識主体である我、認識器官である感官そして認識対象の形象を取ることであり²⁶、YSC の説明もこれに従っているのである。しかし、さらに YSC は *samāpatti* とは対象に完全に入ること (*samyagāpatti*) でありそれが帰入 (*laya*) なのであるとして、*samāpatti* と *Laya-yoga* とを結びつけている。

ナーラーヤナ・ティールタのこの独特の解釈は、ヨーガ論書 (*Yogagrantha*) に基づいてなされている。YSC 1.41 の末尾に次のよう述べられる。

*layayogatvam asyoktaṃ yogagrantheṣu / navasv eva ca cakreṣu marudakṣamanolayaḥ / layayoga iti khyātaḥ samyakprajñānayogataḥ / ityādinaḥ//*²⁷

この [*samprajñātasamādhi*] が *Laya-yoga* であることは「生氣、感官、心が9つのチャクラへ帰入すること、[これが] ラヤ・ヨーガであると知られる、正しい英知であるヨーガに基づいて」など [の教示] によって諸ヨーガ論書に述べられている。

9種のチャクラとは Avalon [1974] により紹介されるタントラ文献に見られる6種のチャクラではなく、ゴラクシャナータ *Gorakṣanātha* を祖とするヨーガの一派であるナータ派の文献に説かれるものを意味していると思われるが²⁸、詩節全体の意味、特に「正しい英知であるヨーガに基づいて」と仮に訳した部分 “*samyakprajñātayogataḥ*” の意味は不明である。

注意したいのは *YBh* 1.41 が言う *samāpatti* の対象は外界の対象のみならず感官や我を含むすべての事物でありえるが、特にチャクラに限定される必然性は全くないという点である。したがって *samāpatti* が *laya* であるというYSCの解釈は、むしろ、上掲引用中の詩節の末尾にある “*samyakprajñātayogataḥ*” という意味不明の言葉を鍵として帰結されたのではないか、という印象を受ける。つまり、ナーラーヤナ・ティールタは何らかのヨーガ論書のこの詩節を見て *Laya-yoga* を *samprajñāta-samādhi* として解釈出来ることを知り、“*samyagāpatti*” という語源解釈を通して “*laya*” という言葉に置き換えが可能な *samāpatti* を *Laya-yoga* であるとした、と考えられるのである。もし *samprajñāta-samādhi* が *Laya-yoga* であるという解釈が一般に流布していたならば、*samāpatti* を説く YS 1.41 の註釈においてではなく *samprajñāta-samādhi* を説く YS 1.17 の註釈でそれを *Laya-yoga* として解釈したはずではなからうか。

また、*samprajñāta-samādhi* そのものを *Laya-yoga* と解釈する場合、*asamprajñāta* と *samprajñāta* という2つの *samādhi* からなる *Rāja-yoga* としての *Pātañjala-yoga* の体系にとって、YS・*YBh* が詳説していないチャクラ説²⁹に基づくヨーガが根本的な要素であることになってしまう。このような困難を避けるために、*Laya-yoga* は *samprajñāta-samādhi* と全く同じものではなく、「二次的同義語 (*aparaparyāya*)」であると述べられたと筆者は考える。つま

り、Laya-yoga を samprajñāta-samādhi に従属するものすることによって問題を回避しているのである。

しかし、何故ナーラーヤナ・ティールタはそのような困難をももたらしかねない解釈をなさねばならなかったのであろうか。彼は、あえて元来は Pātañjala-yoga の体系中には無かった Laya-yoga のその体系中への包含を試みたのだと思われる。ここに、興隆する中世的諸ヨーガを包含することにより Pātañjala-yoga を諸ヨーガの王として確立しようという彼の意図が現れていると考えられるのである³⁰。

YSC は Laya-yoga が八支中のどれに含まれるか明確には述べていない。しかし、次のように考えられるだろう。Samāpatti は samprajñāta-samādhi の際に起こる心の状態である。前掲の YSC 1.1 で示したように、Rāja-yoga の同義語であり無種子三昧 (nirbija-samādhi) とも呼ばれる asamprajñāta-samādhi と比べれば、認識を伴う精神集中は低い次元ものとされる。YSC は samprajñāta-samādhi は低次の離欲 (aparavairāgya) によって生じ、asamprajñāta-samādhi は高次の離欲 (paravairāgya) から生じると考えている³¹。YSC 3.8 では、八支中の総持 (dhāraṇa)・禅定 (dhyāna)・三昧 (samādhi) は asamprajñāta-samādhi、無種子サマーディ (nirbija-samādhi) に対しては直接的な原因ではなく、asamprajñāta-samādhi が生じる為にはさらに高次の離欲 (paravairāgya) が必要であると述べられているので³²、samprajñāta-samādhi は八支中の三昧 (samādhi) とほぼ同じものと見なされていた可能性がある。もしそうであれば、Laya-yoga は八支中の三昧 (samādhi) に含まれるということになる。

5. Lakṣya-yoga

Lakṣya とは、*Maṇḍalabrāhmaṇa-upaniṣad* などによれば、瞑想対象という意味である³³。これには内的・外的・中間の三種があり、内的な Lakṣya (antarlakṣya) は眉間や心臓にある青い光 (nilajyotis), 外的な Lakṣya (bahirlakṣya) は鼻先の外側の空間にある青や様々な色の光等、中間の Lakṣya (madhyamalakṣya) は太陽、月、火炎等とされる [*Maṇḍalabrāhmaṇa-upaniṣad* 1.2.5-11]。これらの対象、特に眉間の光は Tāraka と呼ばれ、ブラフマンであると解釈される [同 1.2.4]。また、舌の根本の上部にも大きな光がありこれも Tāraka であるが、Amanaska と呼ばれる [同 1.3.1]。それ故 *Maṇḍalabrāhmaṇa-upaniṣad* に説かれるヨーガは Tāraka-yoga や Amanaska-yoga と呼ばれる。Lakṣya-yoga とはこれらのヨーガを指すと思われる。

しかし、YSC による Lakṣya-yoga はそれとは少し異なっている。YSC は Lakṣya-yoga は YS 1.35³⁴ によって解かれていると考える。YSC 1.35 は次のように説明する。

nāsāgrādaḥ cittasya saṃyamārūpāl lakṣyayogād divyagandhādisākṣātkāro bhavati/
seyam viṣayavatī pravṛttir viśvāsam utpādyā paramēśvarādāv atisūkṣme manasaḥ

sthitim sampādayatity arthaḥ / tathā ca śāstriyānubhavaviśeṣe jāte śraddhayā
yogino dhyānādaḥ sthirā bhavanti ayam lakṣya-yogaḥ / [35, 10-14]

鼻の頂き等の対象に対する心の制御集中である Lakṣya-yoga は超自然的香りの知覚をもたらす。対象を伴うこの知覚作用は信頼を生みだし、最高自在神などの極めて微細な対象に対する心の集中を達成させる、という意味である。同様に、教義的事項に対する特殊な認識が生じる時は、[それらの事項に関する]信頼によって、ヨーガ行者達は精神集中に安住する。これが Lakṣya-yoga である。

YSC によれば、Lakṣya-yoga とは超自然的知覚をもたらしそれによって得られた信頼を通してその対象への精神集中を持続させるような、そのような瞑想対象 (lakṣya) に対する瞑想なのである。

この YS 1.35 に関しては、既に *YBh* において精神集中によってもたらされる超自然的知覚、例えば鼻の頂に対する精神集中による超自然的香りの知覚、が述べられている。*YBh* によれば、これらの諸知覚は疑いを取り除き精神集中から生じる英知 (samādhiprajña) を得るための手段となる³⁵。さらに *YBh* は、論書 (śāstra)、推論、師の教えによって知られる教義的事項は直接知覚されないが、これらの対象に関する超自然的知覚は教示に対する信頼をヨーガ行者に抱かせると述べている³⁶。ナーラーヤナ・ティールタは明らかに *YBh* に基づいて YS 1.35 解釈しているのである。

しかし、YSC がこのストロガが Lakṣya-yoga をヨーガを説くものであると考える理由は別にある。ナーラーヤナ・ティールタはある伝承聖典 (smṛti) を彼の解釈の根拠として引用する。

yā hi nāsadideśeṣu drṣṭiḥ puṁsām sthirā bhavet / sa lakṣya-yoga ākhyāto yoge śrad-
dhakaraḥ paraḥ / [35, 14-16].

「瞑想者に鼻 [の頂] などの場所の知覚が堅固に現れるだろう。そ [の知覚] が Lakṣya-yoga と呼ばれるものであり、ヨーガに関する信頼をもたらす最高のものである。」

この詩節の出典は明らかではないが、これによって YS 1.35 は Lakṣya-yoga を説くものと解釈されるのである。

このヨーガは八支中の dhāraṇā (総持) に含まれる³⁷。

6. 従属的ヨーガとしての中世的諸ヨーガ：YSC の Inclusivism

これまで YSC においてどのように中世的な諸ヨーガが古典ヨーガ (Pātañjala-yoga) の体系中に組み入れられるかを、Haṭha, Mantra, Laya, Lakṣya という4つのヨーガを例として考察してきた。それらのヨーガは Pātañjala-yoga の説く八支ヨーガの八支いずれかにおおむね組

み入れられている。YSC 1.1 に列挙された15種のヨーガそれぞれについてそれを説くとされるスートラ番号とそれが含まれる八支中の項目を記せば次のようになる。

| | | |
|----------------------|---------------------------------------|--|
| 1) Kriyā-yoga | YS 2.1 | 勸戒 (niyama) |
| 2) Caryā-yoga | YS 1.15, 1.16, 1.33 | 二次的 Caryā-yoga は勸戒 (niyama) 中の清浄 (śauca) と満足 (saṃtośa) |
| 3) Karma-yoga | YS 2.28 | Haṭha-yoga の支分 |
| 4) Haṭha-yoga | YS 1.34, 2.46, 2.49 | 坐法 (āsana), 調息 (prāṇāyāma) |
| 5) Mantra-yoga | YS 1.28 | 勸戒 (niyama) |
| 6) Jñāna-yoga | YS 1.28 | 勸戒 (niyama) |
| 7) Advaita-yoga | YS 1.28 | 勸戒 (niyama) |
| 8) Lakṣya-yoga | YS 1.35 | 総持 (dhāraṇā) |
| 9) Brahma-yoga | YS 1.36 | 勸戒 (niyama) |
| 10) Śiva-yoga | YS 1.36 | 勸戒 (niyama) |
| 11) Siddhi-yoga | YS 1.40 | ? |
| 12) Vāsanā-yoga | YS 1.37, 1.38 | ? |
| 13) Laya-yoga | YS 1.41 | 三昧 (samādhi)? |
| 14) Dhyāna-yoga | YS 1.39 | 禪定 (dhyāna)? |
| 15) Premabhakti-yoga | YS 1.32 (Bhakti-yoga YS 1.23, 28, 29) | 勸戒 (niyama) |

このように、YSC においては様々な中世的ヨーガが Pātañjala-yoga の中に総合されているのである。しかし、これまで検討した例を見ると、Haṭha, Mantra, Laya そして Lakṣya いずれのヨーガに関しても、一般に知られているそれぞれのヨーガの特質とナーラーヤナ・ティールタが記述する特質とに隔たりがある。各ヨーガについてのナーラーヤナ・ティールタの解説は確かに何らかの典拠に基づいていると思われるが、それらをそれぞれのスートラに割り当てる際の解釈はいわば字面だけによった表面的な解釈のようにも見受けられる。

このような解釈によって YSC が目指したものは何であろう。先にナーラーヤナ・ティールタによる Laya-yoga の解釈に関して、興隆する中世的諸ヨーガを包含することにより Pātañjala-yoga を諸ヨーガの王として確立しようという彼の意図がそこに現れている、と筆者は述べた。これが彼の YSC 撰述の一つの目的であったと筆者は考えている。もう一度、第1節に引用した YSC 1.1 の部分を見てみよう。そこでは15種のヨーガと YS の関係が述べられているが、それらのヨーガは samādhi を達成するための手段 (sādhana) であり、その samādhi は Rāja-yoga の二次的同義語 (aparaparyāya) であると言われる。初めに引用した YSC 1.20 にみられるように、Rāja-yoga すなわち“最高のヨーガ”とは認識を伴わない精神集中

(*asamprajñāta-samādhi*) であるから、*Rāja-yoga* の二次的同義語 (*aparaparyāya*) である *samādhi* とは *samprajñāta-samādhi*, 認識を伴う精神集中, であると考えられる。したがって 15種のヨーガすべては, 単に *Pātañjala-yoga* の体系中に “総合されている” のではなく, 基本的には, 二次的 *Rāja-yoga* である *samprajñāta-samādhi* に従属する地位しか占めていないのである。そしてさらには YS が説く真の *Rāja-yoga* である *asamprajñāta-samādhi* に従属していることになる。YSC は *Pātañjala-yoga* の体系中に 15種の中世的ヨーガを従属的に組み入れ, YS が全体では *Rāja-yoga*, 幾つかのストトラによって種々の中世的ヨーガを説くものであるとする解釈を確立しようとしていたことが理解されるのである。

YSC が試みた中世的諸ヨーガの *Pātañjala-yoga* への統合は決して “寛容 (tolerance)” に基づくものではない。*Pātañjala-yoga*こそが諸ヨーガの王者として他のヨーガの上に立つ, というこの主張の根底をなすものは, P. Hacker が “Inklusivismus, Inklusivism” と呼んだ思考様式, 劣勢な集団が優勢な集団に対して自己の優位を主張する際に用いる思考様式に他ならない*。YSC は, 興隆する新しい諸瞑想体系を *Pātañjala-yoga* に従属させることによって, それらによる *Pātañjala-yoga* に対する挑戦に答えようという意図のもとに作られた註釈書であったのである。

はじめに述べたように, YSC には有神論やヴェーダーンタ思想に対する興味深い応答もみられるのであるが, それらに関しては別稿を期してひとまず本稿を閉じたい。

参考文献および略号

- Maṇḍalabrāhmaṇa-upaniṣad. The Yoga Upaniṣad-s: with the Commentary of Śrī Upaniṣad-Brahmayogin.* Ed. by A. Mahadeva Sastri. (rpt., 1st 1920) Madras: Adyar Library, 1983.
- Siddhasiddhāntapaddhati. Siddha-Siddhānta-Paddhati and Other Works of Nātha Yogis.* By Kalyani Mallik. Poona: Poona Oriental Book House, 1954.
- TV *Tattvavaiśārādī. Vācaspatimiśraviracitaṭīkāsaṃvalitavyāsabhāṣyasametāni Pātañjala-yogasūtrāṇi, tathā bhojadevaviracitarājamārtaṇḍābhidhavr̥ttisametāni Yogasūtrāṇi.* Ānandāśrama Sanskrit series 47. Ed. by Kāśinātha Śāstrī Āgāśe. 2nd. Puṇyākhyapatana: 1919.
- YBh *Yogabhāṣya.* See TV.
- YS *Yogasūtra.* See TV.
- YSC *Yogasiddhāntacandrikā. Yogadarśana: with a Commentary Called Yogasiddhānta Chandrikā by Swāmi Nārāyanatīrtha.* Chowkhamba Sanskrit series, no. 154 and 159. Ed. by Paṇḍita Ratna Gopāla Bhatta. Benares: 1910, 1911. [Ch. ed.]

遠藤 康 1995. 「最高のヨーガ：ヨーガ文献における *Rāja-yoga* について」『印度学仏教学研究』43巻 2号

金倉圓照 1974. 「マンダラブラーフマナ・ウパニシャッド (*Maṇḍalabrāhmaṇa-Upaniṣad*) 解題と和

- 訳] 『インド哲学仏教学研究II』 春秋社
- 立川武蔵 1988. 『ヨーガの哲学』 講談社現代新書924 講談社
- 本多 恵 1978. 『ヨーガ書註解：試訳と研究』 平楽寺書店
- 前田専学(編) 1991. 『インド中世思想史研究』 春秋社
- Avalon, Arthur. 1974. *The Serpent Power: Being the Śat-Cakra-Nirūpaṇa and Pādukā-Pañcaka.* (rpt. of 7th ed. 1964, 1st 1919) New York: Dover.
- Endo, Ko. 1993. “The Works and Flourishing Period of Nārāyaṇa Tīrtha, the Author of the *Yogasiddhāntacandrikā*.” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣ*, 14.
- Hacker, Paul. 1983. “Inklusivismus” in *Inklusivismus: Eine indische Denkform*. Ed. by G. Oberhammer. Wien: The De Nobili Research Library.
- Halbfass Wilhelm. 1990. *India and Europe: an Essay in Philosophical Understanding*. Indian ed. (US ed. 1988) Delhi: Motilal.
- Varenne, Jean. 1989. *Yoga and the Hindu Tradition*. Tr. of the French ed., 1973, by D. Colman. (Indian ed.) Delhi: Motilal.
- Yogakośa*, vol. 1, pt. 1. Swami Digambarji and Mahajot Sahai. Lonavala: Kaivalyadhama S. M. Y. M. Samiti, 1972.

注記

* 本稿は東海印度学仏教学会第43回学術大会（1997年7月5日 於同朋大学）における発表原稿に加筆訂正したものである。

- 1 年代は本多 [1978: 33] による。
- 2 *Yogavārttika*についてはT.S.Rukmaniによる訳注研究 *Yogavārttika of Vijñānabhikṣu*(4vols.), New Delhi: Munshiram, 1981-1989が、*Yogasāraṅgraha*に関してはG. Jhaの英訳とVindhyeśvarīprasādaśarmanによるテキストを合本にした *Yoga-Sāra-Saṅgraha of Vijñāna Bhikṣu*, Madras: Theosophical Publishing House, 1933, テキストとヒンディー語訳、英訳からなる *Yoga-Sāra-Saṅgraha of Vijñāna-Bhikṣu*, ed. by R. S. Bhattacharya and G. P. G. Vedantakeshari, Varanasi: Bharatiya Vidya Prakashan, 1989, 研究として遠藤 康「*Yogasāraṅgraha*の業理論」『東方』第9号, 1993などがある。
- 3 中世の区分は前田(編) [1991: ii] による。
- 4 ナーラーヤナ・ティールタの年代については別稿 [Endo 1993] 参照。
- 5 筆者はYSC第1章の新テキストを作成済みであるが、未公開であるため、また本稿では第2章の部分にも言及しなければならぬため、それを利用することは出来なかった。以下においては主として第1章のテキストに関して写本に基づく訂正を行った。その際Ch. ed.の編者によって挿入された句点の削除、あるいは引用等の導入に用いられた“—”の削除、引用された詩節中の句点として用いられた“*”の“/”への変更など正書法に関する訂正、連声法に関連する変更などは必用と思われる場合以外注記しなかった。使用した写本および略号: [D1.] Serial no. 35078, Ms. no. C. 695, *Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts, vol. X, Oriental Research Institute, University of Mysore*, Script: Devanāgarī, Folios: 159, Complete; [D2.] No. 613 of 1887-91, Bhandarkar Oriental Research Institute, Script: Devanāgarī, Folios: 43, Incomplete: folios 41-47 missing; [T1] R. no. 3039, *A Triennial Catalogue of Manuscripts: Collected during the Triennium 1913-14 to 1915-16 for the Government Oriental Manuscripts Library. Madras, vol. II. pt.1, Sanskrit A*, Script: Telugu, Folios: 304, Complete.

- 6 Ch. ed. -sādhānānandātma- をD2. によって訂正。
- 7 Ch. ed. -sarvaviññādirūpaphalasaṃvādāc をD1., D2. によって訂正。
- 8 D1., T1. により *atha yogānuśāsanam iti //* を補った。
- 9 YS 2.29: *yamaniyamāsanaprāṇāyāmapratyāhāradhāraṇādhyānasamādhayo 'ṣṭāṅgāni*.
- 10 それぞれの支分の訳語は本多 [1978] に従った。
- 11 YSC 1.17: *idānim aparavairāgyasādhyam samprajñātam lakṣayati / [19, 4]; YSC 1.18: viramaṇam virāmo vṛttinām abhāvaḥ tasya pratyayaḥ pratyeti janayatīti kāraṇam* para-vairāgyam tasyābhyāsaḥ paunaḥpunyam pūrva upāyo yasya tathā / [19, 18-20]: * janayatīti pratyayaḥ kāraṇam をD2. janayatīti kāraṇam; D1., T1. janayati kāraṇam によって訂正。*
- 12 YBh 1.16: *tad dvayaṃ vairāgyam / tatra yad uttaram taj jñānaprasādamātram / [20, 1]; TV 1.16: aparaṃ vairāgyam uktvā paraṃ āha — tatparaṃ puruṣakhyāter guṇavairiṣṇyam/ aparavairāgyasya paraṃ prati kāraṇatvam / [19, 20-21]*
- 13 Haṭha-yoga の特徴については立川による解説 [立川1988:97-158] を参照した。
- 14 脈管がからまって円盤状になったものと考えられ、一般には6種あると言われる。
- 15 代表的な Haṭha-yoga 文献である *Haṭhapradīpikā*, *Gherāṇḍasaṃhitā*, *Śivasāṃhitā* には佐保田による和訳があるので、それらを参照されたい。佐保田鶴治『ヨーガ根本教典』1978 (改訂版) 平河出版社; 『続ヨーガ根本教典』1978 平河出版社。
- 16 YSC 2.46: *itaḥ paraṃ sakalarogādinvṛttidvārā haṭhayogasyopāyam āsanam āha — sthīrasukham āsanam (YS 2.46) // [82, 5-6]; YSC 2.49: āsanasādhyaprāṇāyāmākhyā-haṭhayogasya lakṣaṇam āha — tasmin sati śvāsaprasāvāsayor gativicchedaḥ prāṇāyāmaḥ (YS 2.49) // [88, 13-15].*
- 17 YS 2.50: *bāhyābhyantarastambhavṛttir deśakālasaṃkhyābhiḥ paridrṣṭo dīrghasūkṣmaḥ*.
- 18 YS 2.51: *bāhyābhyantaraviṣayākṣepī caturthaḥ*.
- 19 尚, YS 1.34 も Haṭha-yoga の調息技法のうち特に *recitakumbhaka* (吐き出した息を外に留め置くこと) を説くと解釈される。YS 1.34: *pracchardana vidhāraṇābhyām vā prāṇasya; YSC 1.34: tathā cātra pūrakavarjanād recitapūritasāntapratyāhārottarādharasamabhedena saptakumbhakeṣu madhye recitakumbhako 'yaṃ prathamābhyāse 'nekaniyamānapekṣatayā prasastāḥ/ sarvam etad agre prāṇāyāmaprakaraṇe sphuṭibhaviṣyati / [34, 26-29]. YSC 1.34 は、心の安定は息を吐き出すこと (pracchardana) と保持すること (vidhāraṇa) によって得られると言う YBh 1.34 におそらく基づいて、Haṭha-yoga, 特に調息は全ての罪悪を破壊しそれを通して心を瞑想対象に向かって安定させ、心の安定をもたらすと言う。YBh 1.34: *kauṣṭhyasya vāyor nāsikāpuḥbhyām prayatnaviśeṣād vamaṇam pracchardanaṃ, vidhāraṇam prāṇāyāmas tābhyām vā manasaḥ sthitiṃ sampādayet // [39, 4-6]; YSC 1.34: evaṃ maitryādibhāvanayā prasannasya cittasya sthityupāyam haṭhayogam āha // [34, 21-22]; tad etābhyām prāṇajaye cittajayas tayor avinābhāvāt prāṇāyāmasya sarvapāpanāśakatvāt pāpanivṛttyā ca cittam ekatra lakṣye sthīram bhavati/ [34, 29-35, 2].**
- 20 YSC 2.28: *atha vā yogāṅgānām dhautivastityādiṣaṭkarmmarāṇam mahāmudrādinām ca anuṣṭhānād dṛḍhābhyāsāj jñānadiptiḥ / ... tathā ca karaṇādārḍhyadvārā *samāhidārḍh yārtham karmayogo* 'pi prathamato 'nuṣṭheyo rogabhīruṇeti bhāvaḥ / sa ca karmayogaḥ-ṣaṭkarmarūpo mudrārūpaś ceti dvividhā nirūpita ākare / [68, 15-23]: *...* Ch. ed. samāhidārḍhyārtharthakarmayogo をD2. によって訂正。YSC が挙げる karman は dhauti, vasti, neti, nauli, trāṭaka, kapālabhāti であり, mudrā は mahāmudrā, mahābandha, mahāvegha, khecari, śakticālana, mūlabandha, uḍḍiyāna, jālandharabandha, viparitakaraṇi である。*

- 21 YS 2.28: yogāṅgānuṣṭhānād aśuddhikṣaye jñānadīptir ā vivekakhyāteḥ.
- 22 YSC 2.28: etac ca sarvaṃ yogāṅgānuṣṭhānād iti sūtre sūtritam api haṭhayogāṅgatvena dehasiddhimātraphalatvena sāksād rājayogānaṅgatvāt kaṅṭha-ravena sūtrakṛtā noktam iti mantavyam iti [73, 1-3].
- 23 YS 1.27: tasya vācakaḥ praṇavaḥ; YS 1.28: tajjapas tadarthabhāvanam; YSC 1.29: kiñ ca japa ity anena mantrayogaḥ [29, 30]; YSC 1.28: evaṃ vācakam uktvā tenaiva samadhigamyasya* paramātmano mānāntarāviśayasya bhāvanam**... [29, 10-11] : * Ch. ed. samādhigamyasya を D1., D2. によって訂正 ; ** Ch. ed. bhāvane を D1., D2., T1. によって訂正。
- 24 YSC 1.28: arthabhāvanarūpaṃ praṇidhānam āha // tajjapeti // [29, 13-14]; tad evaṃ bhaktiyogena bhagavadanugrahas tataḥ paravairāgyād asaṃprajñātasamādhilābhaḥ [29, 28-29].
- 25 YS 2.32: śaucasaṃtoṣatapaḥsvādhyāyeśvarapraṇidhānāni niyamāḥ: YSC 2.32: īśvarapraṇidhānaṃ saṃsāramocakasyeśvaraprasādasyānukūlo vyāpāro mokṣamantrajatatadarthabhāvanādiḥ / ato brahmayogaśivayogamantrayogajñānayogādvaitayogabhaktiyogānām antarbhāvo 'tra mokṣasādhyananiyame jñātavyaḥ / [76, 4-7].
- 26 YBh 1.41: tad evaṃ abhijātamaṅikalpasya cetaso grahitṛgṛhaṇagrāhyeṣu puruṣendriyabhūteṣu yā tatthatadañjanatā teṣu sthitasya tadākārāpattiḥ sā samāpattir ity ucyate // [44, 2-5].
- 27 この部分は Ch. ed. では欠落しているが D1., D2., T1. によって補った。
- 28 *Siddhasiddhāntapaddhati* 2.1-9: piṇḍe navacakrāṇi // ādhāre brahmacakraṃ ... //1// dviṭīyaṃ svādhiṣṭhānacakraṃ ... //2// tṛtīyaṃ nābhicakraṃ ... //3// caturthaṃ hṛdayādhāram aṣṭadalakamalam ... //4// pañcamaṃ kaṅṭhacakraṃ ... //5// ṣaṣṭhaṃ tālucakraṃ ... //6// saptamaṃ bhūcakraṃ [sic] ... //7// aṣṭamaṃ brahmarandhranirvāṇacakraṃ ... //8// navam ākāśacakraṃ ... //9// [9, 3-10, 3]. これによれば9種のチャクラとは 1) Brahma-cakra, 2) Svādhiṣṭhāna-cakra, 3) Nābhi-cakra, 4) Hṛdayādhāra, 5) Kaṅṭha-cakra, 6) Tālu-cakra, 7) Bhū-cakra (Bhrū-cakra?), 8) [Brahma-randhra-] nirvāṇa-cakra, 9) Ākāśa-cakra である。
- 29 YS では 3.29 において臍のチャクラが説かれているのみである。
- 30 学会発表の際に、国立民族学博物館の立川武蔵先生と同朋大学の浅野玄誠先生より、YSC が Laya-yoga を samprajñāta-samādhi に従属させていると考える必用はないのではないかという御質問をいただいたが、充分なお答えをすることが出来なかった。本稿前述の“apara-paryāya”の意味についての筆者の理解と以上とによって、幾分かは御質問に対する答えを補えたのではないかと考える。この場を借りて両先生にお礼を申し上げたい。
- 31 YSC 1.16: tatra vaśikārasaṃjñe vairāgye jāte sati saṃprajñātaprabhāvena puruṣasya yā khyātiḥ pradhānād vivekena yaḥ sāksātkāraḥ ... [18, 15-16]; YSC 1.17: idānim aparavairāgyasādhyam saṃprajñātam lakṣayati / vitarketi // [19, 4]; YSC 1.18: viramaṇam virāmo vṛttinām abhāvaḥ tasya pratyayaḥ pratyeti janayatīti kāraṇam* paravairāgyam tasyābhyāsaḥ paunaḥpunyam pūrva upāyo yasya tathā / khyātisaṃskāra** eva śiṣyate yatra so 'nyo 'saṃprajñāto nirbijāḥ samādhiḥ karmabijābhāvāt / [19, 18-21]: * 前注11参照 : ** Ch. ed. saṃskāraśeṣaḥ khyātisaṃskāra を D1., D2., T1. によって訂正。
- 32 YSC 3.8: paravairāgyadvārā tasya saṃyamasya samādhiniṣpādakatvāt samādhyanantarāpekṣayā tasyāpi bahiraṅgatvam ity āha — tad api bahiraṅgam nirbijasya (YS 3.8) // tad api dhāraṇādītrayam api nirbijasya samādheḥ bahiraṅgam eva sāksādahetur eva / vivekakhyātiparavairāgyadvāraiva tasya hetutvāt / [109, 22-26].

- 33 *Maṇḍalabrāhmaṇa-upaniṣad* の内容については金倉による解題和訳 [金倉 1974] を参照。金倉は *Lakṣya* を「内観的」と訳している。
- 34 YS 1.35: *viṣayavatī vā pravṛttir utpannā manasaḥ sthitinibandhanī*.
- 35 *YBh* 1.35: *nāsikāgre dhārayato 'sya yā divyagandhasaṃvitsā gandhapravṛttiḥ / jihvāgre rasasaṃvit / ... jihvāmūle śabdasaṃvid ity etā vṛttaya utpannās cittam sthitaṃ nibadhnanti, saṃśayaṃ vidhamanti, samādhiprajñāyāṃ ca dvāri bhavanti* / [39, 9-40, 2].
- 36 *YBh* 1.35: *yady api hi tattacchāstrānumānācāryopadeśair avagatam arthattvaṃ sadbhūtam eva bhavati...tathā 'pi yāvad ekadeśo 'pi kaścīn na svakaraṇasaṃvedyo bhavati tāvat sarvaṃ paroḥṣam ivāpavargādiśu sūkṣmeṣv artheṣu na dṛḍhāṃ buddhim utpādayati / tasmāc chāstrānumānācāryopadeśopodbalanārtham evāvaśyaṃ kaścīd arthaviśeṣaḥ pratyakṣikartavyaḥ / tatra tadupadiṣṭārthaikadeśapratyakṣatve asti sarvaṃ sūkṣmaviśayam api ā 'pavargāc chraddhīyate / etadartham evedaṃ cittaparikarma nirdiśyate* / [40, 3-10].
- 37 *YSC* 3.1: *iyam ca dhāraṇā ... / atraiva lakṣyayogasyāntarbhāvaḥ* [106, 21-23].
- 38 “Inklusivismus bedeutet, daß man erklärt, eine zentrale Vorstellung einer fremden religiösen oder weltanschaulichen Gruppe sei identisch mit dieser oder jener zentralen Vorstellung der Gruppe, zu der man selber gehört. Meistens gehört zum Inklusivismus ausgesprochen oder unausgesprochen die Betauption, daß das Fremde, das mit dem Eigenen als identisch erklärt wird, in irgendeiner Weise ihm untergeordnet oder unterlegen sei. Ferner wird ein Beweis dafür, daß das Fremde mit dem Eigenen identisch sei, meist nicht unternommen. (Inklusivismus とは、ある人があるほかの宗教集団あるいは異なった世界観に立つ集団の持つ中心的な観念が、その人自らが属する集団の持つなにかの中心的な観念と同一であると主張すること、を意味する。たいていは、言明の如何に関わらず、次のような主張を Inklusivismus は持っている：他集団の事項であって自集団の事項と同一視されているものは、なにかのあり方で自集団固有の事項に従属している、あるいは下位に位置している。)” [Hacker 1983: 12, 8-16]: “Wie ich schon sagte, ist der Inklusivismus ein Mittel des Unterlegenen oder des noch Schwachen, des noch in Entwicklung Begriffenen, sich durchzusetzen, sich Geltung zu verschaffen. (すでに私が述べたように, Inklusivismus は圧倒されている側の, あるいは弱い側の, あるいはさらには発展途中である側にとつての, 自分の意見を主張する為の, 自身の評価を高める為の手段である。)” [Hacker 1983: 17, 13-16] Inklusivism と “寛容 (tolerance)” の問題については Halbfass 1990 の第22章 “Inklusivism” and “Tolerance” in the Encounter Between India and West を参照されたい。

本稿は平成8年度科学研究費補助金奨励研究(A)による研究成果の一部である。

[付記]

本稿で用いた写本D1. の入手に際しては島根国際短期大学の太前先生より、タントラの実修法については東方研究会の佐久間留理子先生より、それぞれ有益な御助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。